

# 『こんてむつすむん地』考

——きりしたん文学と中世無常観——

井戸桂子

## A Comparison of *Contemptus Mundi* and *Tsurezuregusa*

Keiko IDO

In 1610 *Contemptus Mundi* (『こんてむつすむん地』) was published in Kyoto, the translation of a famous religious book, *Imitatio Christi*; and in Fukui prefecture in the year 1916 a precious copy of this volume was luckily found, allowing scholars to read one of the finest examples of the Christian Literature after over three hundred years.

By comparing the ideas on death found in the 21<sup>st</sup> section of *Contemptus Mundi* with that of *Tsurezuregusa*, the famous essay written by Yoshida Kenko, I would like to examine the several remarkable similarities that these two books share and that explain the translator might have been deeply impressed by this Japanese essay.

Four similarities found are as follows. First, both books relate that death often comes suddenly and unexpectedly. Secondly, each book points out that none are ready to receive the time of death, always counting on there being a tomorrow. And very interesting, thirdly, that they insist that having too long a life is a bit deplorable. Lastly, both books admit the uncertainty of life. Besides these same observations, the expressions used are also very alike, such as the implementation of visual images, or the using of short and powerful sentences. Therefore the affinities examined above suggest that the Japanese translator of this beautiful religious book should have been

most likely deeply impressed by *Turezuregusa* and sometimes followed Yoshida Kenkō's ideas or expressions and used them in the translation.

In spite of those striking similarities, however, there is, between these books, a distinct difference. Significantly *Contemptus Mundi* is primarily a guide book to follow the concepts found in Christianity. As the known lengths of our lives are usually very transient, Kenko adopts a Buddhist approach and recommends us, the readers, to enjoy our life in this world, while the Western religious book guides us to abstain from the joys of this world and pray to God every night with tears and groans in order to be admitted into the next eternal world. The excellent translation together with its Christian teaching and guidance for salvation made *Contemptus Mundi* the most outstanding example of the Christian literature in the 17<sup>th</sup> century.

## 一 はじめに

『こんてむつすむん地』巻第一の第二十一「しするのくはんねんの事」は、死についての教えをキリスト教の立場から説いたものであるが、それは、日本の中世思想、ことに万物流転、諸行無常の世界観と相通じるところがあり、大変興味深い。また、この書が、出版当時のきりしたんの心をとらえたばかりでなく、現代ひもとく私達にも感銘を与えて、吉利支丹文学の中でも、名著の誉れが高いのは、なぜであろうか。

そもそも『こんてむつすむん地』とは、『イミタチオ・クリステイ』を邦訳した吉利支丹版国字本であり、一六一〇年に、京都で出版された。その書を偶然また幸いにも、大正五年、ある研究者が福井藩医の家の裔から譲り受けた結果、この慶長年間出版の稀書は、現在は天理図書館に所蔵され、公に出版され、四百年近く経た私達も、読むこと

が出来るのである。

そして原著『イミタチオ・クリステイ』について一言述べると、これは十四世紀から十五世紀にかけて、修道僧（トマス説とホロート説がある）が近代的信心を實踐し修得するために著わした信心書である。この書は、それまでの多くの神秘書と異なって大変明晰であり、信者にこの世の榮華の空しさを悟らせ、キリスト自身に倣う（イミタチオ）ことを教え、神との一致に至るよう導くことを目的としている。この近代的信心運動は、イエズス会創始者のロヨラにも、さらにはその会則にも影響を与えた。『イミタチオ・クリステイ』はほとんどの近代語に訳され、キリスト教世界で聖書に次いで広く愛読されているといわれる。したがって、この書が、出版活動を布教の重点の一つに置くイエズス会の手によって、十七世紀の初頭に日本で出版されたのも、決して不思議ではない。

ところでこの国字本の以前にかなり早く、天草でローマ字本も出版

されているが、両版のあいだには、大きな違いがある。すなわち、ローマ字本が原著に忠実に訳されているのに対して、国字本は抄訳化が著しく、内容・文体・用語も専門的な要素を除いて、一般信者にわかりやすいようになっていいる。一言でいえば、かなり、日本人向けにアレンジされているのである。(詳しくは、朝日新聞社刊、日本古典全書『吉利支丹文学集』上、一七七ページから一八四ページ、柊源一氏の解説を参照。)しかし、さらにもっと読みこんでいくと、言葉と思想が日本人にとってなじみやすくなっているばかりか、なんと具体的には、『徒然草』のある段と、言いまわしがそっくりのところさえ発見できる。

そこでこの小論においては、『こんてむつすむん地』巻第一の第二十一の「しするのくはんねんの事」を、中世的無常観の典型を示す『徒然草』と比較検討しながら、きりしたんにとっての死の観念について、考察していきたい。

## 二 「しするのくはんねんの事」

では最初に、『こんてむつすむん地』の「しするのくはんねんの事」の内容をみたい。

第二十一の書き出しの文章がその主旨を端的に語っている。「なんぢのうへにこの事(死)はやくきたるべきあひだ、かうせきをよくよく見べし」と。つまりこの章は、人間が必ず、しかも意外に早く迎える死について警告し、日頃の行いの大切さを教えている。すなわち、死は、すべての人に必ず、しかも「おもひがけぬとき(傍点筆者、以下

同じ)」に訪れるのだから、「つねにりんじうを目のまへにもち、まひにちしすべきかくごをなす」ことを、そして、実際に「しごきたらんときおそれず、かへつてくはんぎあるやうにいまよく身をもつ」ことを促す。

また、高貴な人も学識豊かな人も皆、死後は忘れられてしまうほど、全く人の「一命はかげのごとくすぎさ」り、はかないものであるから、死後、永遠の国に招かれるように、すなわち主の御許へいたれるように、今こそ、「なみだとうめきごえをもてまひにちおらしよ(祈禱のこと)に身をなすべし」と、力強く訴えている。

一言でいえば、現世のはかなさと突然到来する死を思い、死後のためにいま善行をなし、祈りなさい、という教えである。

この考え方のうち、後半は別としても、人間の営みはあつけなく、必ず死が訪れるのだという人生観は、まさに、万物流転・諸行無常の定理と一致しないだろうか。ではこの角度から、「しするのくはんねんの事」と『徒然草』とを、読み合わせたい。

## 三 『徒然草』との共通点

『徒然草』の最初の数段は、人間はいかに生きるかという問題を取り上げている。なかでも第四段は、短い一文章ながらも、人間の永遠の命についての凝縮された考えを述べている。すなわち、「後の世の事、心に忘れず、仏の道うとからぬ、こころにくし」と。

死後の事を常に心に置いて仏の道にしたしむことこそ、「こころにく

し」と、兼好最高の感歎語をもって、簡潔明瞭な一文を結んでいる。ここにおける「後の世の事」とは輪廻思想に基づくもので、キリスト教のあの世とは全く異なったものを想定しているわけであるが、それにしても、「仏」の語を「でうす」に交換すれば、「いつも死を念頭において信仰を持つ」という第四段の考えは、「しするのくはんねんの事」をそのまま要約した文といえるほど、思想が同じである。

また、死は必ず、しかも突然やってくるという見方も、『徒然草』に同じく散見される。

「無常（ここでは死のこと）の来る事は、水火の攻むるよりも速に、<sup>すみやか</sup>のがれがたきもの（第五九段）」であり、「死期はついでをまたず。死は前よりも来らず、かねて後に迫（第百五十五段）」っている。「若きにもよらず、強きにもよらず、思ひかけぬは死期なり。今日まで逃れ来にけるは、ありがたき不思議なり。：しづかなる山の奥、無常のかたき競い来らざらんや。その死にのぞめる事、軍の陣に進めるに同じ。（第百三十七段）」と記して、死の突然の到来を語る。

『こんてむつすむん地』においても、死の訪れが急であることを警告する。「ぶかくくなるときしごきたらざるやうに身をよくおさめよ。おもはざる時とんしする者おほし。：いくばくの人か、おもひがけなきとき、むじやうの殺鬼にをひたてられたるぞ」と。ことに傍点部分は、言葉使いも似かよっており、『徒然草』と同様に、突然人間に襲いかかる死のイメージを、短い句ながらも、見事に言い当てている。

またここで両書の「しご（死期）」という言葉の使い方も、注目に値

する。古語ではふつう「死期」とは、「死ぬとき」である。たとえば『今昔物語』の「預め死期を知る」、『日本霊異記』の「死期に合はざる」、『正方眼蔵随聞記』の「不定なる死期をいつまでいきたるべし」などの文例でわかるように、「命が尽きるとき、臨終」といった、「時」を表す言葉である。

しかし、『こんてむつすむん地』と『徒然草』においては、「しごきたらんとし」あるいは「死期はついでを待たず」というように、「死期」は、念々にわれわれに迫っている「死そのもの」を指す。必ず、しかも突然にやってくる「死そのもの」という意味を与えている。この特殊な使い方は、先に指摘した、「人間を急襲する無常の敵」という死のイメージと共に、『こんてむつすむん地』の訳者が『徒然草』から学んだものといえないだろうか。

さらに、両書が指摘するのは、こうした突然の死の訪れを普通の人間は自覚しておらず、明日を頼りにして暮らすばかりである、という事実である。

すなわち、『徒然草』では、「身を養ひて何事をか、待つ。期するところ、ただ老と死とにあるのに、みな、「生をむさばり利を求め」「惑へるものは：名利に溺れて先途の近き事をかへり見ず」「愚かなる人は：常住ならんことを思ひて変化の理を知ら（以上、第七十四段）」なのだ、と冷静に人間を見つめる。また、なにかを志す人も、「夕には朝あらん事を思ひ、朝には夕あらんことを思ひて（第九十二段）」という具合に、いつも明日がある、まだ時間がある、と当てにしているが、

それは誤りであると説く。

『こんてむつすむん地』でも、「しよせん人のをはりといふは死」であるのに、人は「もくぜんの事ばかりをしあんして」、現在の状態が続いていくと思っている。しかしそれは間違いである、という。まだ時間之余裕があると思つてはならない、と諭す。たとえば、「あしたにはゆふべにいたらんとおもふ事なかれ。ゆふべには又あしたをみるとや。く。く。く。する事なかれ、」と、厳しく、しかし具体的に教える。そして、ただちに実行をうながす。すなわち「わがたすかりのためとなる事をのちとのぶる事なかれ。」と、命じる。このように教示しながらも、やはり一方、「人の心かたくぐちなる物かな」と嘆かざるをえないのである。さらに興味深いことに、両書ともに、いたずらに長生きすることは望んでいない。

兼好は、「命長ければ辱多し。(第七段)」と言い切つて、四十歳未満で死ぬのが無難であるとする。同じく信心書の方も、善をわきまえないで長生きしても益はなく「かへつてとがをかさぬる事おほし。」と断定する。

ところで、このあたりの指摘は、思想ばかりでなく、いい回しまでも、両書そっくりなのは驚かされる。

結局のところ人間の最後は死であるというやや突き放した語調、目先のことにのみ心を捕らわれている愚かな人間を苛立ちをもつて眺める見方、朝と夕とを対照的に配して時の流れを実感をもつてわかりやすく具体的に表現する方法、長命と罪の量とを正比例によつて捉える考え方、などなど、『こんてむつすむん地』第二十一の文の運び方は、

まことに、『徒然草』の寄せ切れといえるほどである。

さて、生に執着している人間も、みな、結局は必ず死を迎える運命にあるのだという人生観は、まさに、無常という世界観である。

定まるものはない(不定)、常なるものはない(無常)という意識を、両書共に切々と訴え、さらにはそれを肯定するまでに至っている。

兼好は、「人の命ありと見るほども、下より消ゆる雪のごとくなるうちに、営み待つこと甚に多し(第百六十六段)」というように、雪のイメージと重ねて人間の営みのはかなさを語る。しかも無常なのは人間だけではない。「折節の移りかはるこそ、ものごとくに哀なれ。(第十九段)」という文のように、自然界においても時間的経過によつて変化流転がもたらされることを嘆じている。そして、「生、住、異、滅の移りかはる実の大事は、たけき河のみなぎり流るるが如し。暫も滞らず、ただちに行ひゆくものなり。(第百五十五段)」と、世の中一般の移り変わりの論理を力強く展開する。

「しするのくはんねんの事」においても、「けふあるひとあすは見えず。もくぜんをはなるとともにわすらるる」し、「一命はかげのごとくすぎさる」ものにすぎないのだから、「せかい(地上)にをひてよろづのいとなみにかかはらざるたび人のごとく身をなすべし。」と、無常なる世の無常なる人間の存在を語る。その根無し草のような存在を影や旅人にたとえて語る文章は、『徒然草』の中にそのままめ込んで、違和感を与えないほど無常観に満ちている。

そして両書共に、この世の不定・無常を認める。つまり、その事実

から逃れよう、あるいは、否定しようという姿勢は、全くない。まさに、兼好の言葉で言えば、「世はさだめなきこそ、いみじけれ。（第七段）」となる。

以上のように、『こんてむつすむん地』の「しするのくはんねんの事」と、『徒然草』とを並べて読んでみると、両書共に無常観という思想に支えられていて大変おもしろいが、見落としてならないのは、文章上の影響の深さである。

『こんてむつすむん地』は翻訳書であるにもかかわらず、今まで引いた例で明らかのように、『徒然草』と言い回しまでそっくりなところがある。言葉とイメージの使い方、例のあげ方、和文調ながらもきびきびとしたリズム感のある文体、語り手の自信溢れる主張振り、など、両書のあいだには、文体上の類似が多い。

ここで少し、『こんてむつすむん地』の訳者について推量をめぐらせたい。ここまで文体が似ているならば、訳者は、『徒然草』を読んだことがある人、もっと積極的にいえば、『徒然草』に深く感銘して、同書から精神的糧を受けとるばかりでなく、その文体までも知らず知らずの内に脳裏に焼きつけていた人、あるいは極言すれば、同書を範として翻訳にのぞんだ人、といえるのではないだろうか。そしてこの訳者は翻訳の際に、いつのまにか覚えていた『徒然草』の言い回しを思わず使ってしまったのではないだろうか。逆からいえば、文章を潜在的に意識にとどめてしまうほど、訳者は『徒然草』に親しみ、共感を持っていたのである。

このような『徒然草』をはじめ古典文学に通じた教養人という訳者像をさらに突き詰めて、具体的に細川ガラシャとその周囲の人々の名をあげる研究者もいる。（前掲書、一八二ページ参照。）この説は、一つには、一五八八年二月二十日のフロイス（日本史の編者として有名な、イエズス会のルイス・フロイス神父）の書簡に、細川ガラシャの求めに応じて『コンテムツスムンチ』を贈ったと記してあること、もう一つには、ガラシャの義父で古典学者として有名な細川幽斎は『徒然草』の写本（細川幽斎本）を残しており、ガラシャは同書に親しめる環境にあったこと、などからみて、多少とも信憑性があるのではないだろうか。

いずれにせよ、不定・無常・愚痴・題目などの仏教用語を駆使し、『徒然草』でみかけるような磨かれたしきも分かりやすい文体で綴られたこの名訳は、吉利支丹文学中でも白眉といわれるのは当然である。

#### 四 「きりしたん」としての一線

ところで、『こんてむつすむん地』における死の観念は、「人の命ははかなく、死は突然、必ずすべての人に到来するものである」という点では、確かに、本小論でのこれまでの読み合わせで明らかになったように、中世的無常観と共通している。しかし、それだけでは片付かない教えをこの信心書は含んでいる。世の無常を認める点では両書一致しているが、「ではそれを認めたのち、この世において、現世において、人間はいかに生きるか。毎日なにをしたらよいか。」という問に對

する答えは、両書のあいだに、一線を書きねばならない。そしてその線こそが、きりしたんにとつての信仰の根本を守るのである。

『徒然草』を貫く思想は、仏教特有の無常観であるが、兼好は世のはかなさを嘆くだけで止まてはいない。むしろ逆に、無常であるからこそ趣深いのであって、今という現在を精一杯生きなさい、積極的に楽しみなさい、と薦める。すなわち、「世はさだめなきこそ、いみじ（第七段）」く、季節も移り変わっていくからこそ「ものごとに哀れ（第十九段）」なのである。また第九十三段では、はつきりと、「人、死を憎まば、生を愛すべし。存命の喜び、日々に楽しまざらんや。生ける間生を楽しまずして、死に臨みて死を恐れば、この理あるべからず」と主張する。つまり、無常を自覚して初めて、現世の一瞬一瞬の大切さと現世を楽しく生きようという積極的な意義とが、あらためて新鮮に浮かび上がるのである。生の喜びが見い出されるのである。決して樂觀的なあるいは享樂的な人生謳歌ではないが、無常を確認した上で、人生の目標を「現世」に定めているといえよう。

一方の『こんてむつすむん地』では、無常の自覚ののち、人間に何を求めさせているのであろうか。『徒然草』とは対照的に、目標を「来世」に、つまり神のまします「永遠の国」に、定めている。そしてその来世への入り口である臨終をしっかりとした態度で迎えるために、今から毎日身を慎んで善をなすことを教える。すなわち、「いかにきやうだい、つねにしすべき事をおそれつつしみ、いまかいまかとおもふにをいては、いかほどのあやうき事またおほくのおそれをものがるべし。…以後きりしとともにながらへ奉るために、いませかいにてし

するやうをならへ。そのときはりたるたのもしき心をもつべきために、今ぺにてんしや（悔悛のこと）をもてなんじがしきしん（色神）をせつかんせよ。」と説く。

『徒然草』も、『こんてむつすむん地』もどちらも、無常を自覚しているからこそかえって、現世を大切にせよと呼びかけるが、その大切にするための具体的な教えが、前者では、「現世における生の喜びを見出せ」であり、後者では、「立派な臨終を迎えてキリストのもとへ行けるよう、身を慎んで善行をなせ」なのである。『こんてむつすむん地』では、現世が大切とすれば、それは永遠の国に入るための準備段階としてのみ大切なのである。ここに、「きりしたん」とは、無常観を共通の土壌とした日本人ではあるが、あくまでもキリスト教の教えを守り信仰生活に入る熱心な信者であることを示す、一線がある。そしてその信者は、毎夜、涙とうめき声をもってお祈りを捧げるのである。すなわち、この第二十一の最後は、はつきりこう結ぶ。「ししてのちなんぢのあにま（靈魂のこと）くはほういみしく御あるじへいたり奉らんために、なみだとうめきごえをもてまいにちおらしよ（祈禱のこと）に身をなすべし。」と。

## 五 おわりに

『こんてむつすむん地』における死の観念は、今まで検討してきたように、「この世は誠に不定であり、死はいつ到来するかわからないから、臨終のときにあわてないように、現在からよく身を慎み、祈りを

捧げなさい」というものであるが、最後に、この教えを、当時の日本人きりしたんがどのように受け止めていたのかについて、言及したい。

十六世紀の中葉に日本に伝来したキリスト教が、あのように短時日にひろがった背景には、寺院の権威が一部失墜し民衆の仏教信仰が衰退してきたこと、また、台頭しつつある民衆が自らの宗教を選べるようになったこと、などの当時の宗教事情と、南蛮貿易を意図する大名達の積極的な関わりがあったという経済事情などが、指摘できる。しかし、最盛期には、当時二千万人といわれる日本の人口の内、三十万人の信者総数に上ったという事実から考慮しても、やはり、キリスト教の教えそのものに人々を惹きつける力があつたからこそ、これだけの広がりがあったといえるのではないだろうか。ではその力とは、たとえば、この死の観念についての教えの場合では、何であろうか。

『こんてむつすむん地』のこの教えが当時のきりしたんを納得させることが出来たとすれば、それは、この教えが彼らに、実際の生活感情に基づいた強烈な救いの道を提示したからである。当時の日本人は、仏教の伝統から教養としての無常観を十分に心得ていたし、また事実、下剋上の世の移り変わりを目の当たりにして、否が応でも現世のはかなさを身にしみて感じていた。そのような日本人が、初めてキリスト教の教えに出会い、『こんてむつすむん地』の一章をひも解き、臨終への準備さえしていれば主のもとへ行けるという教えを発見したとすれば、すがりたくなっても不思議はない。つまり、日常的なレベルで常に無常観を意識していた人々にとって、もっと積極的に言えば、無常観あふれる現世の苦しみを昇華させる力強い救いの手を必死に求めて

いた人々にとって、この救いの力はあまりにも強烈である。永遠の国へ行けることに希望を託せるとは、なんと魅力的で頼もしい教えであろう。有り難い教えであろう。一言で言えば、彼らの意識と実際の生活状況が、『こんてむつすむん地』の死についての強力な教えを納得せざるを得ないような境遇にしていたのである。さらに加えるに、この『国字版こんてむつすむん地』は、きりしたん文学中でも白眉といわれる、あの名訳である。本小論で検討したように、『徒然草』とも比される思想的な深みと文体をそなえている。無常観を意識させた上で、力強い救いの教えを、見事な文体で説いていけば、異宗教であるにもかかわらず、この教えは素直に受け入れられていても当然であろう。このようにして、『こんてむつすむん地』が、無常観に代表される中世思想と名訳との相乗効果によって、初めて出会うキリスト教の信心書であるにもかかわらず、日本人にとって、ことに中世を経て下剋上をくぐり抜けてきた日本人にとって、非常に馴染みやすいものとなり、彼らに愛読され得たに違いないことは、容易に想像される。だからこそ、この書が、禁教となった徳川の三百余年を通じて、福井の、とある旧家の土蔵の奥で、密やかに慈しまれていたのである。

#### 〈引用書〉

新村出・柊源一校註、日本古典全書『吉利支丹文学集』上、『こんてむつすむん地』、朝日新聞社、昭和四十一年。

西尾実校註、日本古典文学大系、三十、『方丈記、徒然草』、岩波書店、昭和四十一年。